

本日の論点

2019.9.12 ビジョン課

1 新ビジョンはなぜ必要なのか

- ・ 現行ビジョン（21世紀兵庫長期ビジョン：2001年策定、2011年改訂）に代わる兵庫県の新しい将来ビジョンを策定することについて、単に想定年次（2020年頃）が来るという以上の積極的な意義を説明できるか。

【参考】新ビジョン策定の必要性（例）**1) 地域のリアルな将来像を県民と共有する必要性**

今後数十年の間に、人口が半減する地域が広がっていく可能性がある。低出生率による自然減がその主因であり、出生率の大幅な上昇がない限り、多少の社会増が実現したとしても、総人口の減少局面から脱することは難しい。

楽観論にも悲観論にも陥ることなく地域の未来を冷静に考えていく出発点として、まずは、人口減少の趨勢を前提とした、自然体の地域の将来像を描き出す必要がある。特に人口減少により県土空間の使い方がどのように変わるかを「見える化」することは、県土空間の望ましい使い方を考える上で必須である。

2) 価値観や生活様式の変化の行方を見通す必要性

スマートフォンの登場が世界中の人々のコミュニケーションの方法を一変させたように、日々進化するICTは、県民の価値観と生活様式を大きく変えていく可能性がある。

ICTの発展、これに伴う社会、経済のボーダーレス化・グローバル化、その中で進む急速な人口減少と少子高齢化という大きな潮流の中で、県民の価値観はどのように変化し、県民の生き方、働き方はどのように変わっていくのか。こうした点について見通しを持つことなしに、地域の未来を考えることは難しい。

3) 地域づくりの方向性を明示するビジョンの必要性

21世紀兵庫長期ビジョンの策定から20年、改訂から10年近い時が経つ。その後世界も日本も共に大きく変化した。現実の社会の変化を捉え、今後の行方を見定めた上で、21世紀の兵庫づくりの方向性を改めて考えるべき時ではないか。

特に、人口の減少と偏在化が同時進行し、地域社会の様相が様々に変わり行く中で、兵庫を形作る地域のそれぞれがどの方向に進もうとしているのかが見えづらい状況にある。県内各地の地域づくりの指針となる新たなビジョンが求められている。

また、資源に限りがある中、あらゆる課題に同時に取り組むことはできない。何に重点を置いて取り組むべきかを判断する拠り所となるビジョンが求められている。優先順位付けと取捨選択の指針となることが期待されるものである以上、骨太で明確なビジョンでなければならない。県民の総意を反映させつつ、総花的でなく、進むべき道を分かりやすく指し示す新ビジョンとしなければならない。

2 新ビジョンはどのような機能を担うか

- ・来るべき社会において兵庫県の新ビジョンが担うべき機能は何か。
- ・そのためにどのようなスタイルのビジョンとすべきか。
- ・また、そうした機能を担うビジョンはどのようなプロセスで作るべきか。

【参考】新ビジョンが担う機能等についての有識者意見（2019.6～7 ビジョン課聴取）

（担うべき機能）

- ・今必要とされているのは、人口減少をきちんと前提に据えて、それでも安心して暮らし続けられる社会、「豊かさ」「幸せ」を実感できる社会を作っていく指針となるビジョンだ。
- ・現行ビジョンは、人口減少を視野に入れつつも、県民の「夢」と「希望」の反映を重視して取りまとめた結果、現実から遊離した「バラ色の未来」に近いものになってしまった。
- ・ビジョンを作る第一の意味は、県職員にとって必要だから。県行政の中で指導力を発揮できないようなビジョンでは作る意味がない。行政自らを変えるビジョンであってほしい。
- ・行政の役割を再定義し、民間が社会的課題の解決の主役になる流れを作っていく必要がある。
- ・新たなプロジェクトや社会実験を次々と生み出していくようなビジョンに変えてほしい。
- ・OODA 型の問題解決アプローチが浸透する中、方向付け（Orient）の拠り所としてビジョンの重要性が高まっている。ビジョンとは、成長の方向性。失敗しても、二の矢、三の矢を射る心構えや準備を与えるビジョン、各自の試行錯誤や自発的行動を促すビジョンが求められる。

（スタイル）

- ・素直に現実を見るビジョンが求められている。人口減少が進んで地域はこうなる、生活はこうなると淡々と示すことがまず大切。希望的観測で将来人口を見積もるようなビジョンは不要。
- ・分厚い計画書を作っても誰も見ない。組織全体がコミットするビジョンを示し、「この実現のために各部署で自由に考えてくれ」というメッセージを発信することが大切。
- ・ビジョンで一番大切なのは、芯となる哲学、全体を通じたメッセージ。そのためには「寄せ鍋」ではダメで削ぎ落とす作業が必須。シンプルなビジョンにできるかが重要なポイントだ。
- ・毒のある、棘のある、尖ったものにどこまでできるかで、ビジョンの値打ちが決まる。

（策定プロセス）

- ・計画づくりで市民の意見を聞くスタイルが一般化したけど、多くの意見を聞けば聞くほど、より妥当な将来の見通しを持てるかというと、決してそんなことはない。
- ・人の意見を聞きすぎると、既得権への配慮が効き過ぎて身動きの取れない計画になるか、何でも書いてあるが、結局どの方向に進むのかわからない計画になりがち。
- ・住民の意見聴取は必須だが、これから重要なのは企業（企業人）の参画。現場で課題に向き合っている民間の最先端の動きを知り、そのアイデア、ノウハウを取り込むこと。
- ・海外からどう見えているかを知ることが大切。外国人の意見をしっかり聞くべき。
- ・行政が真面目に議論し、真面目に対策すると、財政負担が増し、結果として次代につけを回しがち。今の若い世代に加え、将来世代の視点も入ったビジョンにする必要がある。
- ・地域差が大きい県なので、地域ビジョンが大切。ただ、頑張って地域を良くしようという人の意見ばかりでなく、普通の県民がどう思っているのかにもっと注意を向ける必要がある。

3 新ビジョンの検討に当たって重視すべき課題は何か

- ・様々な社会的課題の中で、兵庫県の新ビジョンの検討に当たって特に重視する必要がある中長期的な課題は何か。
- ・また、現在大きな課題となっていないが、今後クローズアップされる課題としてどのようなものが考えられるか。

【参考】本県を取り巻く環境変化と中長期的な課題例

○本格的な人口減少社会の到来

- ・少子化（子育て環境整備等の対策強化、少子化が進む中で子どもの教育環境充実）
- ・超高齢化（認知症を含む要介護者増加への対応、人手不足の中での医療・介護体制整備）
- ・都市への影響（地方都市の衰退、中心市街地の再生、オールドニュータウン問題への対応）
- ・農山漁村への影響（小規模集落の増加、生活水準の維持、耕作放棄地・荒廃森林への対応）
- ・地域経済への影響（内需の減少、労働力不足、医療・介護等サービス産業のシェア拡大）
- ・空間の変容（空き家・空き施設の増加、低未利用地の拡大、社会資本の老朽化・選別化）

○世界規模での構造変化

（科学技術の発展）

- ・ICTの進化（一人一台スマートフォン時代の到来、自動運転・ドローン等の標準装備化）
- ・医療の発展（寿命の延伸、健康な高齢者の増加、人生100年時代の到来、自分時間の増大）

（グローバル化）

- ・経済のグローバル化（大きくなる世界と小さくなる日本、国家を凌駕する経済主体の台頭）
- ・国際人口移動の拡大（富を求めて移動する人の増加、不可逆的に混ぜ合わさっていく世界）
- ・都市間競争の激化（成長のエンジンとなる都市の育成が急務、都市基盤投資の増強が必要）
- ・兵庫の活力を生む成長産業の育成（本県において今後重点的に育成すべき産業分野は何か）
- ・兵庫の魅力向上の方向性（インバウンド拡大に効果的な魅力向上策、快適な居住環境整備）

○県民の意識・行動の変化

- ・人同士の関係性の変化（濃く狭くから薄く広く）
- ・モノからコトへ（所有から利用、体験重視、個性重視、物質的豊かさより精神的豊かさ）
- ・家族の変化（女性の社会進出拡大、未婚化、世帯の単独化の進展、高齢単身世帯の増加）
- ・新しい働き方の拡大（フリーエージェント化、キャリアの複線化、脱終身雇用・年功序列）
- ・所得格差の拡大と貧困の再生産（生活保護世帯の増加、貧困家庭の実態把握の必要性）

○地球環境の変化

- ・気候変動（気温上昇、短時間大雨の増加等）による異常気象の常態化、自然災害の激甚化
- ・地球温暖化防止の更なる取組に加え、海洋汚染や食品ロス等の新たな環境問題への対応
- ・喫緊の課題として30年以内に70～80%の確率で発生するとされる南海トラフ地震対策

○その他

- ・今後の行政の役割（民間企業など行政以外の多様な主体による地域課題への対応の拡大）
- ・人口減少の行方（人口はどこまで減るのか。地域はどこまでの人口減少に耐えられるのか）